

不登校生徒を抱える母親への援助

第三者の視点に立ち、わが子の心を理解すること へのアプローチ

会津大学短期大学部

社会福祉学科

郭 小蘭

不登校生徒を抱える母親への援助

第三者の視点に立ち、わが子の心を理解すること へのアプローチ

郭 小蘭

平成 21 年 12 月 20 日受付

【要旨】 本論文は筆者が中学校の心理臨床活動の中でかかわった事例の紹介を通して、学校臨床心理士（SC）が不登校生徒を抱える母親に、第三者の視点に立ち、わが子の心を理解するという方向へ働きかけるアプローチが有効であることを論じる。本論文を通して、子どもの発達の特性に着目し、子どもの本来持っている潜在的な可能性を生かすことが子育て支援の基本的な視点であることを不登校生徒への支援という側面から論述する。不登校生徒の母親は、自分の子どもが早く学校にいけるように切実に願うあまり、心労が大きいため、その結果として、落ち着いた気持ちで子どもの置かれている状況、子どものニーズ、子どもの能力などを冷静に静観し、自分が子どもに必要とされる時だけ、丁寧に応じるというようなかわり方をすることが大変難しい。だが、このようなかわり方は不登校生徒への支援活動として大変必要とされるし、子どもの心の成長にとって大変望ましいことである。このことを学校臨床心理士（SC）、教師、保護者に伝えていきたい。

本論文の中で主に扱うキーワードは子どもの主体性の尊重、第三者の視点、図表面接法、母親との協働である。論文の内容は、「問題意識」（ここではなぜこのテーマを取り扱うか、テーマの内容について述べる）、「図表面接法」（筆者が実践しているアプローチ、図表面接法を紹介する）、「事例検討」（筆者が本論文で取り上げられたアプローチを用いた実際の事例、S君の母親への支援事例を紹介し、事例全体に対する考察を行う）、「総合的考察」（保護者のコンサルテーションにおける図表面接法の有用性を述べる）という4つの部分から構成される。

キーワード：子どもの主体性の尊重、第三者の視点、図表面接法、母親との協働

問題意識

子どもの主体性の尊重

乳幼児期の子どもの発達の特徴について『保育所保育指針』（平成20年3月厚生労働省）は次のように捉えている。子どもは大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに人への信頼感が育つ。子どもは、子どもを取り巻く環境に主体的にかかわることにより、心身の発達が促される。乳幼児期は、生理的、身体的諸条件や生育環境の違いにより一人一人の心身の発達の個人差が大きい。子どもは遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。

では、中学生という年齢の子どもの発達の特徴はどうだろうか。発達心理学では自我の発達と自我同一性の確立が青年期の発達課題として知られている。青年期の親子関係について、青年は親に依存しながら精神的にも経済的にも自立していく。親からの理解は青年の情緒の安定と心の成長にとって大切であるということは今までは強調されなかった。筆者は本論文で親からの理解は自立過程の途中にある子ども、特に中学生という年齢の子どもにとって情緒の安定を保ち、意欲を持たせる前提条件であると提言したい。

なぜ親からの理解は大事かについて筆者は次のように考える。子どもは人とのかかわりの中で自己を意識し、他人とのかかわり方を体得していく。親とのかかわりは中学生という年齢の子どもにとって、幼児期に劣らないほど大切な人間関係である。安定している親子関係の中で、中学生は自己存在感、人への信頼感をもち、未知のものに対して積極的な関心をもってアプローチしていく。こういう意味では、中学生の発達の特徴と乳幼児期の子どもの発達の特徴と共通点があると言える。今社会問題になっている不登校問題は人間関係の発達が十分にされていないことと関係があるといわれている。不登校生徒の声は「人は信用できない、親だって」「いろいろ細かいことについても気になる、不安だ」「人とかかわる自信がない」「人間関係は面倒だ」「何もしたくない」「みんなの中で浮いている」「集団の雰囲気を読めない」「私だけ変」「一人だ、寂しい」など、これらの声は子どもは本来もっている主体性を発揮することができず、人間不信になり、無気力状態になってしまうことを物語っている。

不登校生徒が自分に、未来に希望を持てるようにするためには、もう一度子育ての原点について親とともに確認する必要性があり、この確認作業により、親も子どもを信じ直すことができると筆者は考える。子どもの主体性の尊重をもう一度不登校生徒の親に呼びかけることは子どもが不登校状態から再登校状態に変わるのに効果的であると筆者はスクールカウンセリングの中で経験している。この経験を本論文で紹介したい。

第三者の視点からわが子の気持ちを理解する

学校教育における親の立場については、筆者は次のように認識している。どんなことがあっても最後に子どもを守るのは親である。こういう意味で子どもにとって親が一番大事なキーパーソンである。親は子どもの意思を尊重したかわり方で子どもを支援することもできれば、子どもの意思が分からずに一方的な親切で子どもを傷付けることもできる。子どもの意思を尊重する意識が親にあるかどうかは子どもに対する接し方と関連性があると思われる。筆者の論文(郭、2009)はこのことを示す事例を提供した。

不登校生徒の親は子どもに一刻でも早く学校に行ってほしいという願うあまり、なぜ、今、学校に行かないのか、子どもは行かないことによって何を訴えているか、言い換えれば、行かないことによるメリットは何か、子どもの真の声に目を向けることが少ないようである。このことに目を向けさせるためには親に第三者の視点でわが子の心を見つめてもらうことが必要ではないかと提言したい。親支援に関する今までの研究は親の心情に対する受容が強調されているが、親の意識を変革させるにはどうしたらいいかについては実践的な研究が少ない。不適応問題の当事者となるクライアントに意識の変化を持たせる心理療法としてブリーフセラピーが知られている。しかし、コンサルテーションとして、なお、第三者の視点から、大事な社会的資源となる親に認識の変化を持たせるというアプローチは少ない。筆者はこの点に注目する。

不適応問題を抱える不登校生徒の問題はその子ども自身の持っている特性だけによるものではないと筆者は考える。家族療法というアプローチで不登校問題を考えれば、「多くの個人の心理的問題や関係の問題は人と人との間の認知と行動の違いが発端となっており、それらがストレスフルな関係や行き詰まった相互作用をつくり、個人の症状や関係の問題として表現されていると捉えられる」(平木、2007)。筆者は平木氏と同じ見解をもっている。

不登校生徒の母親を援助する際に母親の認知内容を知り、認知の中核となる母親の個人的な信念を変えることが必要であると考え。親の信念と親の行動の間に関係があり、それらが子どもの認知能力に影響を及ぼしているという実証的なデータがある(郭、1991)。親の信念、行動の子どもの情緒に対する影響も理論的に考えられる。こういう理論的な背景があり、筆者は実際の学校の心理臨床活動の中で親の子どもに対する接し方を巡って母親の認知、信念に変化が起きるように働きかけることを心がけている。「どのように子どもに接したらいいか」という悩みを持つ母親の事例(郭、2009)も筆者のこの考えを支持する事例でもある。

図表面接法という発想

親に第三者の視点に立ち、わが子の心を読み取ってもらうには、面接者は親と一緒に子どもの置かれた環境・状況、子どもの心情・欲求の予測、子どもの行動による家族全体の変化を図表で親に

わかりやすく表しながら子どもの心理を考えるという作業、ここでこの作業を「図表面接法」と命名するが、この作業が効果的であると筆者は提言したい。この作業の中で親に「自分が子どもだったらどのように感じるか」と聞いたり、親子の口論を面接者（親役）と親（子役）でロールプレーして演じたりすることも含まれる。筆者は親がロールプレーの中で始めて子どもの本音に気づくことが多いという経験をもっている。親が第三者の視点でわが子を見つめることができるようにするため、図表で分りやすく表しながら面接を行うことは今までなかった。このアプローチは新しい。

筆者はなぜこのアプローチを用いたかについて簡単に紹介する。不登校問題で来談する親の中に次のような特徴が見られる親がいる。「子どもの不登校の経過」について時系列的に詳しく紹介することが多いが、経過の紹介の中で「主語がはっきりしない」や「考えと行動が入り混じる」、「親自身がどのように考え、何を行ったのかはよくわからない」など、話の内容がわかりにくい。そこで、筆者は面接時間が限られている中で、親の話をつ断させずなるべく多くの情報を聞けるようになるために、親の話の要点を親の目の前に図表で分りやすく表わしながら書いてみた。そうすると、筆者は次のことに気づいた。親は面接者に見つめられる時間が減る分、親の緊張感が減る。親は面接者の理解できていないことも相対的に気軽に教えてくれる。この作業を行っている時の雰囲気はまさに協働である。面接者も親も同じ立場で子どもの行動を眺め、分析している。この作業の中で、面接者は「子どもの気持ちは」と「親の気持ちは」と親に聞くことがある。親は「子どもの気持ちは」と聞かれたときに子どもの視点で考え、結果的に第三者の視点でわが子の気持ちに気付くことがよくある。今回の面接内容と前回の面接内容を図表の比較を通して振り返り、親と一緒に良い変化を見つめることができる。親は面接者の書いた図表を持って帰りたいという場合がある。その場合は、図表のコピーを渡して親は家にいるときにもこのコピーの内容を再度読んで考えることができる。このように、一回の面接内容が親の気持ちの中はかなり深く入っていき、親の意識の変化を短期間で期待することができる。図表を書くときなるべく肯定的な言葉で記述することが望ましいと考える。それは人の気持ちへの配慮とリフレミング効果を念頭におくからである。以上のような利点があると考えられるので本論文を通じて、この方法を検討していく。

親との協働

不登校生徒への支援にあたって個別援助技術のほかに集団援助技術、地域援助技術も時には必要である。筆者は通常家族集団全体に対する支援という視点からアプローチしている。不登校状態になった子どもの欲求及び子どもの発達課題の他に、親の欲求および課題の分析、親同士の関係性、家族同士の凝集力の程度、家族全体の成長なども視野に入れて全体的な力関係を吟味しながら助言している。心理臨床の領域では近年個別心理相談のほかに家族という集団の関係性に注目され始めている。特にスクールカウンセリングという領域では親への支援、教師への支援、地域への支援と

というのが不登校生徒により過ごしやすい環境を提供するという意味で必要不可欠であると考え、これから一層注目されるだろうと思われる。

親は子ども、家庭に関する主な情報提供源である。親の認識が変われば、子どもの置かれた状況が変わっていなくても、重要な社会的資源となる親の理解が得られたら、子どもは家に居場所があり、子どもの心理的な緊張感がかなり緩和されると考えられる。スクールカウンセラーの役割の一つは親の意識・認識が変わるように促すことであると考え。親は自分の子どもに対する願いにとどまらず、家族全体の姿を視野に入れて、それぞれの家族成員が頑張っていると客観的に認識できるようになるのは筆者の親への支援の最終的な目標である。

本論文の目的は、親の認識の変容による行動変容（「とにかく学校にいてほしいという行動から、子どもの主体性の成長を願う行動へ」、「子どもの問題行動ばかりが目につくから子どもの良いところを見つけ、もう一度子どもを信じ直すという行動へ」）を親への支援のねらいにし、このねらいを実現するために図表面接法は有効な方法であると提言することにある。

図表面接法の内容

図表面接法とは、来談者の相談内容の要点を来談者の目の前に図表を書き、分りやすくまとめていく作業のことをいう。この作業の利点について前の節で述べたのでここで省く。筆者の実践していたいくつかの例を示す。

1 初回面接で使う表（表2を参照）

初回面接で聞く主な内容は表1のようなことである。これらの内容は初回面接で一般的に聞く内容であり、特別な内容ではない。しかし、このような内容の要点を来談者の話に沿いながら図や表にしてまとめ、そのまとめを来談者と一緒に振り返り、分析するという作業はこの図表面接法の特徴である。ここで留意事項を一つつける。それは、図表面接法とは、事前に表を用意し、来談者の相談内容を表に埋めていく作業ではない。このことに留意してほしい。なぜならば、もし、表を埋める作業であるならば、来談者の話の範囲を制限する面接者がリードするという雰囲気があり、来談者の主体性を妨げることにつながることが考えられるからである。

表1 初回面接で聞く内容

項目	内容	聞き方
Q1	来談者の期待	「ここでどんなことを聞けたらいいと考えたでしょうか」
Q2	・これまでの経過 ・これまでの対応	・「いつ頃から」、「何かきっかけは」 ・「今まで誰かに相談しましたか。その結果は？」 「今までやってみたことは？うまくいったことは？」
Q3	家族構成・生育歴	・「家族構成は」 ・「今まで大きなけがや病気にかかったことは？」
Q4	相談できる身内の人 や友人の有無	「相談できる身内の人や友人はいますか」
Q5	相談利用の効果	「相談されて少しお気持ちが楽になれるかもしれません」 や「一緒に考える人がいて心強いと思います」と伝える
Q6	一緒に行う作業は 何かについての合意	例「まず、子どもに対する接し方を中心に一緒に考えていくことができますが、このことで一緒に考えていきますか」
Q7	最初の具体的な目標 の設定	例、「まず親子の会話がスムーズにできるようになるのを目指して面接を継続して、やってみますか。」
Q8	来談者の感想	例、「今日いろいろ話されて今のお気持ちは」

上述した内容を中心に来談者の話を聞きながら表2を作り、来談者からの情報を整理していく。整理し終わってから、面接者は来談者と一緒に表2を振り返り、「大変だったね」、「よくがんばっている」、「小さな目標から一つひとつ達成していこう」というように面接者は発信する。面接者の発信の中に来談者の気持ちに共感を示し、来談者の努力を労い、そして、一緒にがんばろうという協働意識を確認していくということが含まれる。この作業により、面接者と来談者の心理的な距離がかなり短くなり、今後の面接における信頼関係の基盤づくりになると考える。この初回面接の組み立て方は通常のカウンセリングにおける初回面接の組み立て方を参考にしたものである（中釜、2004）。

表2 初回面接内容の表（面談時、話の要点を聞きながら作成していく）

項目	内容	来談者について	他者（例、子ども、同級生）について
Q1	聞きたいこと		
Q2	・いつ頃から ・きっかけ ・これまでの対応		
Q3	必要があれば ・ご家族のこと、 ・今まで大きなけがや 病気にかったこと		
Q4	相談できる人は		
Q5	相談利用のよさ		
Q6	一緒に行う作業は		
Q7	最初の目標は		
Q8	今日ここで感じたこと		

2.2 回目以後の面接で使う表（表3を参照）

表3 2回目以後の面接で使う表

項目	質問内容	来談者について	他者（例、子ども、同級生）について
Q1	ここ一週間の様子		
Q2	変化		
Q3	今気になっていること		
Q4	特に先に解決したいこと		
Q5	SC からの共感的內容		
Q6	SC からの助言		
Q7	面接に関する感想		

3．親子のやりとりに関する記録表（書式は自由）

親の子どもに対する接し方、子どもの親に対する態度を読み取るために、「書式は何でもいいが、ここ一週間の親子の会話、様子を記録していただけないか」と来談した親に依頼する。次に親に持ってきてくれた記録内容を親と一緒に分析していく。分析する際の留意点は まず親の言いたいことの本音を確認し、それを肯定的に受け止める。親の心情を受け止めながら親の言葉から考えられる他の意味を推測し、親の言葉がもたらす結果について一緒に考える。このことを通して親に自分の接し方を客観的に振り返ってもらうことを図る。今不適應状態にある子どもだったらどういふふうに親の言葉を受け取るだろうか、一緒に考える。以上3つの作業の中で親は自分のわが子に対する接し方を客観的に振り返り、子どもの気持ちになって考え、第三者の視点でわが子の気持ちに気づくことができるようにする。ここでS君の母親への支援事例を通して、親子のやりとりに関する記録表を紹介し、検討していく。

不登校生徒 S 君の母親への支援事例

事例概要

来談者：A さん、40 代の女性

主訴：新しい環境の中に入っていけない中学生の息子 S 君が不登校になり、どうしたらいいか

家族：A さん、夫、長女、長男 S 君の 4 人家族

来談までの経緯：家庭の事情で新しいところに引っ越してきた。家族全員にとって新しい環境に適応しなければならないという課題がある。S 君は気が優しい子どもで、今まで親に反発したことがあまり見られなかった。新しい中学校に馴染めずに一学期が終わり、夏休み明けから不登校になってしまった。家族に学校に行くと言われると S 君は大変怒り、家族と口を利かなくなった。朝起きられず、夜遅くまで起きているという生活リズムの乱れも見られる。S 君の母親の A さんは「せめて私と話せるようになってほしい」や「朝起きてちゃんと朝ご飯を食べてほしい」と願っていた。S 君が学校に行かないことに対して、家族は無力を感じながら何か月か経っていた。そこで、S 君の担任は家庭訪問に行き、学校に来校するスクールカウンセラーに「相談してみないか」と母親に声をかけ、母親が相談にきたのである。

面接構造：約週 1 回、1 時間、90 度の対面法。S 君の中学校の心理相談室で面談する。

事例経過

表 4 面接内容の概要（2 カ月間、6 回分の面接内容）

面接回数	面接内容			A さんの変化
	A さんが語った S 君の姿	A さんの行動	SC の助言	
初回	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に行かず、自分の部屋に閉じこもり。 ・昼夜逆転の生活。 	<ul style="list-style-type: none"> ・S 君に「学校に行きなさい」という。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「A さんも大変。」 ・「S 君はさびしい思いをしている。」 ・「声のかけ方について一緒に考えよう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・A さんは担任の家庭訪問に頼っている。しかし、S 君は担任に会ってくれなかった。

2回目	前回と変化なし。	「うるさい」と言われないうちに気をつけるようになったが、うまくいかなかった。	・「どのようなやりとりをしているのか」を知るために「会話の日記をつけようか」。	自分の声かけに意識を配るようになった。
3回目	<ul style="list-style-type: none"> ・昼起床（前回より早く起床）。 ・親に頼み事が沢山。 ・親のきめ細かさに不満を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「早く起きて」。 ・「みんなと一緒に食べたら」という。 ・S君の身の回りの世話をやりたがる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「S君の変化はAさんの努力と関係がある」とAさんの労を労う。 ・「AさんはS君の身の回り世話をAさんのペースでやりたがる様子があるように思える」と確認した。 	以前はAさんのペースで動いていたと気づいた。S君に対する言葉のかけ方に戸惑っている。
4回目	<ul style="list-style-type: none"> ・午前に起床。 ・母親との会話が少しスムーズになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「我慢する」というS君の言葉を聞いて嬉しかった。 ・「明るくなってほしい」と願う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「S君は子どものようにお母さんに甘えている。この姿から母子関係が暖かいものにかわってきたように感じた」。 ・「S君に任せて様子を見守る」と助言した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんの表情は明るくなった。 ・今まで過干渉だったと反省した。 ・長女は大変明るい方で、長女に対するような接し方で、S君に接していくと考えるようになった。

<p>5 回目</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・朝起こしてもらい、起床。 ・表情はにこにこのときもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「早く起きようになってよかった」とS君をほめた。 ・食事をしたかどうかは気になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「AさんはS君の起床、食事のことに目が行きやすいね」「家にいるとどうしてもそのことが気になるなら、Aさんは昼間少し出かける時間を作ってみてはどうか」と助言した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母子の会話が少し弾むようになった。母親の「お休み」という挨拶に対して、S君は以前だと「勝手に寝れば」と言うが、今は「お休み」で返事が返ってきた。
<p>6 回目</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・母親に「早く起こして」と頼んだり、自分で起きたりするようになった。 ・母子一緒に食事するようになった。 ・夜眠れないことを母親に言うようになった。 ・ペットの話題で家族と話せるようになった。 ・一日中ゲームをやるといようなことをしなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・S君のためにペットを飼った。ペットのことを通して、寂しさの緩和と我慢の力がつくと考えた。 ・母子一緒に食事するのを喜んでいった。 ・今までS君が夜中に眠れず、起きていたのに気づかず、今その話を聞き、びっくりした。 ・昼間自分が出かけるようにしたが、やることなく、帰ってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「S君は家族に寂しさが分ってくれて嬉しかっただろうね。」 ・「家族と一緒に食事し、会話をするようになり、ほっとしましたね。」 ・「やることなくつまらないという気持ちはつらいね」と共感を示した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「今までS君の気持ちをあまり考えていなかった」や「S君は本当にさびしかった」と気づいた。 ・「父親はS君のことをどう思っているのか、聞いてみたい」と父親の参加を意識するようになった。

上記の表の内容を示す母子のやりとりは以下のようなものであった。言葉の表現は若干変えた。

3 回目の面接時に提示された記録内容

(括弧の中は SC と A さんが一緒に記録内容を振り返る時の発言、気づき、SC の働きかけである)

-
- X月12日 11:00 頃起床。「のりなかったから買ってきて」という。
11:50 頃買ってきたと声をかける。
12:30 ご飯が冷めるから食べたらと声をかける
13:00 「テレビ、電気、消してね」というと、食後全部消して自分の部屋に行った。
- X月13日 13:35 頃起きて昼食
部屋掃除するからという、「物をわからない処にしまわないで」という。
(ここで SC は「S 君に聞いてからしまうのではないのですね」と聞き、
A さんの気づきを促す)
- X月14日 13:30 頃起きておかずを見て食べなかった。
- X月15日 12:40 頃起きる
- X月16日 13:30 頃起床
「昼食何にするか」と声をかけると「何でもいいから」というが、
「うどん作るから」というと「またうどん」という。
「じゃ何食べる」ときくと「もう。うるさい。いいから」という。
- X月17日 11:30 頃起床
昼食食べる
ご飯を残そうとしたところ、「食べなさい」というと「なさいかヨ」という。
(SC は A さんに「お母さんは S 君の身の回りの世話を細かくやろうとしているようで、中学生の S 君はお母さんの質問の一つひとつ答えるのが「面倒」のようですね」と伝えた。A さんは「そうか」といった。)
-

4 回目の面接時に提示された記録内容

(括弧の中は SC と A さんが一緒に記録内容を振り返る時の発言、気づき、SC の働きかけである)

-
- X月20日 母：「朝ダヨ！起きたら」
子：眠っていて返事はなし
母：「一回起きたらどう？」と少し声を大きくしたら
子：返事はなかったが、一回目を開け、また、眠った。

夕食時おかずを見て「あれ？ラーメンじゃなかったの」ときく。

母：「ごめんね。明日ね」

子：「今日作ると言ってなかった？」

母：「気が変わったから」

(SCはAさんに「気が変わった理由」を聞き、他の家族への配慮が理由であったということがわかった。「他の家族を優先してしまったとS君に思われてしまうかもしれないね。お母さんはそのつもりはないでしょうけれども」とAさんのS君に対する配慮不足を間接的に伝えた。Aさんは「そういえば、そのことでS君に文句をいわれたことがあった」と思い出した。ここで、お母さんの思い、S君の思いを分けてAさんに意識させた。)

X月21日 子：「寒くて布団を変えてヨ」

母：「そう、わかった」

母：「今日自分で起きたの。」

子：「うん」

X月22日 母が飲み物をつまらせていたらS君は「大丈夫？」といった。

以前は一緒に食事する場面が少なかったし、このように優しい声かけを聞いたことがなかった。Aさんは嬉しかった。

(SCは「よかったね」とS君の変化に喜びを感じ、それを言語化した。)

5回目の面接時に提示された記録内容

(括弧の中はSCとAさんが一緒に記録内容を振り返る時の発言、気づき、SCの働きかけである)

X月25日 母：夜「あした、どうする？起こす！」

子：「別にいいから何もしなくて！」

(SCは「そういう気持ちでしょうね」という)

母：「お休み！」

子：「お休み」

(SCは「今までは、同じ場面ではどのような反応があったか」とAさんに確認したら「今まではお休みをいうと、勝手に寝ればという」反応だったそうである。SCは母子の会話は少しずつスムーズになってきたと感じ、それをAさんに伝えた。Aさんも嬉しい表情であった。)

X月27日 朝起こしてもらって起床。「早く起きてよかった」とほめた。表情がよかった。食べたかどうか気がなった。

母：「買い物をするけど、何かある！？」という

子：「お菓子を買ってきてヨ！」「やっぱ、我慢するヨ！」という

母：「え！本当？ありがとう！」という

(AさんはS君の「我慢する」という言葉に対して非常に嬉しかった。また、Aさんはこの頃S君に対する接し方について長女に対する接し方のようにあまり干渉せずに接していけばいいと語った。この気づきが短期間の面接の中でできたことは、Aさんは毎回真剣に自分のS君に対する接し方を巡ってSCと一緒に分析し、深く考えてきたからと思われる。)

また、(SCは「子どもの行動や心情をよく観察し、見守る」と一般論として助言したが、Aさんの語った内容からみて、Aさんの注意はどうしても「起きること、食事」に向けているようで、そこでSCはAさんに「食事を用意しておいて、いつ食べるかはS君に任せて、お母さんは出かけて何か楽しいことをやってみたらどうでしょうか」と助言した。「S君との距離をある程度とっておいたほうがS君にとっては楽のような気がしますが、どうでしょうか」とAさんに聞いた。Aさんは快くこの助言を受け入れた。)

6 回目の面接時に提示された記録内容

(括弧の中はSCとAさんが一緒に記録内容を振り返る時の発言、気づき、SCの働きかけである)

Y月3日 ペットを飼った。S君がさびしくないようにするため。ペットの世話で

「我慢強さ」を身につけてほしいから。

S君はペットに関する話題を他の家族ともよく話していた。

Y月4日 母は昼間出かけることにした。が、すぐ家に帰ってきた。

Y月5日 子：「あー！昼前が嬉しい。起きてよかった」という。とてもにこにこしていた。

母：「ほんと、すごいね、やったね」という

(SCはAさんに「お母さんに褒められたS君の嬉しい気持ちはにこにこしていた表情に出ていますね。」と伝え、ほめることの効果をAさんに伝えた。Aさんは「今までほめなかった」と振り返った。)

Y月6日 母：夕方「おはよう」という

子：「朝起きたし」

母：「お母さんがいなかった頃？」

子：「うん」にこにこしていた。

(SCは「起きないことを心配する必要がないようですね」とAさんの気づきを促した。)

Y月7日 子：母のご飯を見て「うまそうじゃ！」という。
母：「たべる？」
子：「たべるヨ！今日は朝から起きていておなかすくし」
母：「そうダネ。じゃ、作るから、まってね」

Y月8日 朝早く起きていた。「眠れなかった」といった。
昼食いっしょに食べた。
母：「昼、一緒に食べるのは久しぶりだね」
子：「うん」
母：「おいしいね！」
子：「これはうまいヨ！」

(この頃S君は朝起きるようになり、一日二食か三食をしっかりと食べるようになった。Aさんも昼間出かけるようにしていたが、やりたいことが見つからずに、すぐ帰ってしまう。「S君のやりたいことがないつらい気持ちが少しわかったような気がする」という。)

Y月9日 朝 起きて食べて、ペットと遊んでいた。
夕食時呼びにいくと、うとうととしていた。声をかけたが、起きてこなかった。
起こすようにしなかった。

(Aさんは「以前何かしてあげないと自分かわると思っていた。今はほっておいても自分かわるくないと思えてきてほっとした」という。Aさんは自分自身の変化に気づき、それを語った。)

Y月10日 朝自分で起きていた。
母：「おはよう」と声をかけると
子：「おはよう」とうれしそうだった。「おにぎりを作って！」という。
母：「はい。中味は何にする？」
子：「梅」。食べ終わってペットと遊ぶ。

Y月11日 子：朝ご飯を食べて「おいしい」といっていた。
そして「昨夜眠れなかった」という。
母：「え！本当？」と驚いた。

(SCは「S君は自分のことを話してくれたね」というと、Aさんは「以前は、全然自分のことを話さないし、聞かれてもいいからといって話さなかった。今は自分から自分のことを話すようになった」と言った。SCは「お母さんに少し心を開いてくれたね」とAさんの意思を確認すると、Aさんは嬉しそうに頷いた。また「父親はS君に声をかけてはいるが、父親にS君にもっと積極的にかかわってほしい」とも言った。)

以上は6回分の面接時の記録内容であった。この後、SCは別の学校に変わったので、ここで終結してしまった。

事例に対する考察

ここでは6回分の面接の中でAさんはどのように変化していったのか、図表面接法はAさんの行動・態度の変化にどのように寄与したのか、検討していく。

初回面接と2回目の面接では、Aさんは穏やかな口調で「学校に行ってほしい。担任に家庭訪問をもっと頻繁に来てほしい」と語った。Aさんの面接における口調から「行きなさい」や「起きて！」というような指示・命令の態度を読み取ることができなかった。しかし、3回目以後の面接で母子のやりとりの記録内容を読むと「！」という符号が多かったこと、「・・・ヨ」という語尾が多かったことにSCは気づいた。SCはこの気づきについてAさんと一緒に話し合った。Aさんも「自分でも命令のつもりがなかったが、改めて読み直すとそうだなあと考えた」と語った。

3回目、4回目の面接時に提示された記録内容は「起きて!」「ご飯を食べたか」という内容がほとんどであった。SCはAさんがS君をずっと見ているように感じ、これではS君に「うるさい」と言われてしまうだろうなあとS君の気持ちに共感した。そこでAさんに「見てはいるが、口出しをしないほうがいいのではないかと助言した。AさんはSCの助言を真剣に受け止めてくれて、自分の声かけがうまくいかないことに気づいた。その後、声かけに配慮をしつつ、それでもS君の身の回りのことに口を出してしまう姿が見られた。そこでSCは「ご飯を用意しておいて、昼間出かける時間をつくったらどうか」と助言した。Aさんは家を出るときも「電気」「ご飯」など、S君にいろいろ言うてから出かける姿が記録から読み取れた。SCは「中学生に対する接し方としてみると、かなりきめ細かい世話をしているなあ」と間接的にAさんの過保護を伝えた。Aさんは指摘されて「そうか」という感じであった。この反応から反省が見られたが、強い反省ではなかったようにSCは感じた。しかし、日に日にS君は明るくなり、Aさんとの会話も変化があり、「もういい」という言い方から「昨夜眠れなかった」と、自分の気持ちを語るようになった。これらの変化をもたらした理由の一つはAさんの態度の変化によるものだと考える。Aさんは「以前は、起きて!」というが、今は「早く起きてよかったね」とS君をほめるようになった。この変化はS君のAさんに対する不満の軽減につながったのではないかと考える。

第5回目、第6回目の面接では、Aさんの発言から少しゆとりが感じられた。Aさんは「うとうとしていたS君は起きなかった。それをほっとくことができるようになった」と自分の変化に気づき、ゆとりのある表情をしていた。たった2か月の間、6回の面接の中でAさんはこのような大きな変化があったのは一体なぜだろうか。これについて図表面接表という視点から検討してみる。

図表面接法の良さについてすでに述べたように、親の話の要点を親の目の前に図表で分りやすく

表わしながら書いてみると、親は面接者に見つめられる時間が減る分、緊張感が減る。親は面接者の理解できていないことも相対的に気軽に教えてくれる。この作業を行っている時の雰囲気はまさに協働である。面接者も親も同じ立場で子どもの行動を眺め、分析している。この作業の中で、面接者は「子どもの気持ちは」と「親の気持ちは」と親に聞くことがある。親は「子どもの気持ちは」と聞かれたときに子どもの視点で考え、結果的に第三者の視点でわが子の気持ちに気付くことがよくある。今回の面接内容と前回の面接内容を図表の比較を通して振り返り、親と一緒に良い変化について見つけることができる。親は面接者の書いた図表を持って帰りたいという場合がある。その場合は、図表のコピーを渡して親は家にいるときにもこのコピーを再度読んで考えることができる。このように、一回の面接内容は親の気持ちの中はかなり深く入っていき、このことにより、親の意識の変化を短期間で期待することができる。以上のような利点はS君の母親への支援事例でも確認された。

Aさんは毎回整理された話の内容のコピーを大事に持って帰り、次回に自分の書いた母子の会話記録を持ってきてくれた。SCはAさんの書いた記録用紙に目を向けながら話すことは、面に向かっていることよりは、SCの言葉が「見てはいるが、口出しをしないほうがいいのではないか」というような少しストレートな言葉でも、Aさんはそんなにきつく感じなかったようであった。これは、Aさんも第三者の視点で自分の行動や態度を見つめていたからと思われる。また、4回目のところで「ラーメンじゃなかったの?」というS君の疑問に対して、Aさんは別の料理にしたと言った。そこで、SCはAさんがS君のことを本当に大事にしているだろうかと疑問に思えた。そこでメニュー変更の理由をAさんに確認したら他の家族の好みを優先したことが理由だったとわかった。SCは「S君のラーメンではなく、他の家族の好みを優先したのは、S君にどのように思われるだろう」とAさんに問いかけ、「嫌だろう」とAさんはSCからの指摘でS君の気持ちに気づくことができた。筆者はこのことを通して図表面接法だから理由を単純明瞭に聞くことができるのだと感じた。また、前回の記録内容と今回の記録内容を比べてみてAさんとS君はそれぞれがどのように変わったと思うか、Aさんに問いかけ、「自分がS君のことをほっとくことができるようになり」「S君は明るくなった」とAさんはそれぞれの変化について気づき、ゆとりがある表情で語った。上述したことをまとめると、図表面接法の良さは第三者の視点で自分の気持ち、子どもの気持ちを振り返ることができ、より客観的に自分の行動・態度を見直すことができることだろう。

総合的な考察

保護者のコンサルテーションでは、子どもが心理的な問題を抱えていて、保護者としてどのように子どもに接していけばいいか教えてほしいという声をよく耳にする。筆者は子どもに対する接し

方として「子どもの日常行動をよく観察し、子どもの気持ちを察して見守る」と一般論として助言することもあるが、具体的な場面における実例なしでは、保護者はこの助言の内容を具体的に理解することが難しい。

また、不登校生徒を抱える保護者の中に「自分の接し方を変えたい」ということで相談に来る保護者もいる。保護者の接し方を変える場合には、まず、保護者がどのような接し方をしているのかが知り、なぜ、そのような接し方をしているのか理解することは必要である。「なぜか」を理解する中で、保護者の行動や態度を支えている保護者の心の奥にある価値観、その場その場の状況、保護者のニーズを把握することができる。保護者と子どもの実際のやりとりを分析する過程の中でも、保護者の価値観、ニーズ、家族の状況をより明確化することができる。図表面接法というアプローチは親子のやりとりを整理し、それを視覚的に分りやすく知ることができるだけでなく、保護者が第三者の視点でわが子の心を理解することができるよう働きかけるのに有効であると考えられる。しかしながら、図表面接法は今まだ発想という段階であり、一つの方法論として提示するにはまだ不十分であると考えられる。今後さらに多くの研究との比較をした上でこの発想を検討していく必要があると考えられる。

最後に本事例を研究用に公表することを快諾してくださった A さんに深謝の意を申し上げます。

参考文献

- 郭（1991） 就学前児をもつ中国の母親の信念 指導法に関する母親の信念、行動および子どもの表情的思考力の関係 発達心理学研究 第2巻 第2号
- 河合隼雄編（1999） 不登校 金剛出版
- 河合隼雄（2003） 臨床心理学ノート 金剛出版
- 黒沢幸子・中釜洋子（2004） 家族に関する支援. In: 倉光修編: 臨床心理学全書 12 学校臨床心理学 誠信書房
- 宮田敬一(2007) プリーフセラピー. In: 臨床心理学特集 第7巻第5号 金剛出版
- 平木典子(2007) 家族心理・家族療法. In: 臨床心理学特集 第7巻第5号 金剛出版
- 郭（2009） 不登校生徒をもつ母親の面接過程 接し方を巡る母親の葛藤 会津大学短期大学部研究年報 第66号